

週日の説教

金 大烈 神父 2011年6月30日(木)

《正しいことを優先にする》

今日の第一朗読(創世記 22・1 - 19)では、アブラハムの信仰が紹介されています。昔からカトリック教会では、アブラハムのことを『信仰の先祖』と呼んでいます。もちろんアブラハムの心にも、一人息子を捧げることに對する疑問はあったのでしょう。しかし、神様の言葉だから疑わずに従おうと決心し、100歳になる年にやっと得られた一人息子のイサクを生贖^{いけにえ}として薪^{たきぎ}の上に載せることまでしました。

もし、私たちがアブラハムの立場ならば、神様にどのような返事をしたのでしょうか。夢や幻、思い込みではなくて、本当にイエス様、神様が現れて、このような要求をされたら、どのような反応を見せるのでしょうか。自信がありますか？ あなたがくださった命なのだから、あなたが持って行かれても当然です、と答えられますか？

これは極端な話です。しかし、このように極端なことではなくても、普段の生活の中で、神様は小さい、細かい要求をいつも私たちにしていっぱいします。しかし私たちは、ほとんどの場合「なぜそれを私がしなければならないのですか」と言って拒もうとしています。私たちがアブラハムを『信仰の先祖』と呼ぶのは、アブラハムが、私たちに人間にはできないような信仰を見せてくれたからです。この話には、「最後まで、全てのことを神様のみ旨に任せて、委ねて、従えば、必ず結果は実る。」という福音が隠れているのです。

私たちは、理論的には「神様に全て委ねれば、神様は絶対に私たちを退けない。」と分っています。分っているのに、日常の生活の中で、神様を拒んでいることがないのでしょうか。それを考えてみると、やはりアブラハムを『信仰の先祖』と呼ぶのは当然なことなのでしょう。アブラハムのような深い固い信仰、神様に対して疑いさえ持たない絶対的な信仰^{ちゅうぶ}が与えられるように、願いましょう。

今日の福音(マタイ 9・1 - 8)に入ります。人々が、中風^{ちゅうぶ}の人を寝かせたまま運んで、イエス様の前に連れて来たと書かれていますね。人々というのが仲間なのか、村の人なのか、親戚なのか、については具体的に書かれていません。

昔、イスラエルの人々は、“病は罪の結果”であると考えていました。特に、律法学者や信仰深い人々は、そう思っていました。だから長い間、“罪を犯した人が病気になる”と教えられていました。そしてその当時は、安息日には、病人を癒して命を救うことさえ禁じられていました。

そのような時代に、中風にかかっている人を運んできたのですから、この人々には、やはりいろいろな葛藤があったことでしょう。「不思議な力を持っているイエスという青年のところにこの病人を連れて行けば、癒していただけるかもしれない。しかしその周りには、ネズミ捕りのように罠を仕掛けているファリサイ派やいろいろな権力者がたくさんいるのだろう。この人を連れて行けば、自分たち

も責められるかもしれない。」という気持ちになったことでしょう。いろいろな葛藤があったと思います。

では私たちはどうでしょうか。正しいことなのに、周りの視線を気にしていないでしょうか。これをして人から責められるのではないかと、思うことはないでしょうか。たとえば、交通事故で人が道に倒れ、事故を起こした車が逃げたとしましょう。周りの人は、「この事件にかかわれば大変な時間をとられるし、面倒な仕事もしなければならぬ。」という気持ちになるでしょう。しかし私たちならば、後先のことは考えずに、何とかその人を救うべきです。しかし、今の時代は面倒なことを避けようとする時代になってきています。そのような誘惑に負けないように、私たちが頑張らなければいけないことを今日の福音を通して考えてみました。

ありがとうございました。